様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

□平成　23　年　6　月　1　日現在

機関番号：37405
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2006～2009
課題番号：18520525
研究課題名（和文）平安貴族における遅刻と時間厳守の研究

研究課題名（英文）A Study about Late Coming and Punctuality in the Heian Aristocratic Society

研究代表者
細井　浩志（HOSOI HIROSHI）
活水女子大学・文学部・教授
研究者番号：30263990

研究成果の概要（和文）：平安貴族の遅刻の実例を集め、遅刻が多発する原因について、特に摂関期に関して、その原因を明らかにできた。また報時装置である漏刻と日本の時刻制度について、その起源を推測し、古代・中世日本において信じられていた宇宙構造論に関して、多くのことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research determined the causes of late coming of nobles in the Heian era especially in the Sekkan era by gathering samples. In addition I surmised the origin of clepsydra and the time system in Japan, and clarified many points about cosmic structures believed in ancient and medieval Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,100,000	0	1,100,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	3,300,000	660,000	3,960,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：遅刻、漏刻、時刻制度、陰陽道、宇宙構造論、蓋天説、須弥山説

１．研究開始当初の背景

研究開始当初は、日本古代における時間意識、こと時刻に関しては、まとまった研究業績が少なく、また先行研究も主に時刻制度と計時方法の解明を目的としており、人々の時刻観念の研究は少なかった。一方、平安貴族は多くの儀式において、儀式書の規定もしくは陰陽師による日時勘申で、開始時刻を指定させているが、実際の儀式の場面では、遅刻、中退、時には意図的なサボタージュが頻発していたことが古記録より窺える。そこで平安貴族がどのような感覚で儀式に遅刻をしたのか、どの程度の遅刻ならば許されると考えていたのかを探求することは、次の点で必要不可欠であった。

(1) 日時勘申を行う陰陽道が隆盛する理由を、一見これと相反する遅刻の頻発現象と対比しつつ、正当に評価する。

(2) 政治史研究において、儀式への不参加が

彼らの常識の範囲内なのか、それとも政治的な意図に基づくサボタージュなのかを判断する。

(3) 今日では時刻に追われる日常生活を送る日本人の時間意識を、時刻の歴史の出発点である古代において解明し、人間とはどれほど時間を意識しながら生きられるかを知るという今日的課題を解決する糸口とする。

２．研究の目的

平安貴族の時間観念、特に時間遵守に関わる観念を解明することを目的とする。

３．研究の方法

古代の法制文書・儀式書における時間規定、実際の儀式・行事における貴族官人の時間遵守および遅刻に関する様態を調査することで、彼らの遅刻が多発する原因を解明する。

４．研究成果

平安貴族における遅刻の様相を史料的に追跡したところ、特に摂関期については次のことが判明した。

(1)高位貴族は政務・儀式への遅刻が常態化しており、それを踏まえて遅刻の作法が存在した。これは時刻に拘束されないことが、その尊貴性と関わっていたからである。

(2)一般官人も遅刻が常態化しているが、高位貴族よりは厳しく対処される傾向がある。

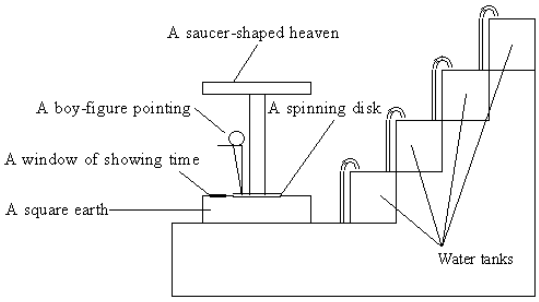
(3)遅刻が常態化する背景には、一般的には時刻の表示装置が共有されていないこと、呪詛が横行するなかで貴族は自己の物忌を優先したこと、貴族の不摂生な生活態度より来る不健康さ、道路等のインフラの未整備、またそれが貴族社会全体にルーズな政務・儀式運営を許容する雰囲気をもたらしていた点があったこと。

このうち最も重要なのは、時刻の**表示**装置が共有されなかったことである。天皇は**計時**装置としての漏刻の所有者でもあり、時間による労働管理を通じて臣下に対して権威をもったという論理は、ひとまず認められ、これによって「来るべき時刻に遅刻」したという概念が成立した。ただし、時間が共有されない状況下での時間による管理の強化は、遅刻の頻発をもたらしたのである。同時に、時刻の表示装置が共有されていないにもかかわらず、陰陽師の日時勘文等によって、儀式の時刻を厳重に管理しようという建前があり、これは陰陽道成立との関係で 9 世紀後半より強調されるようになった。また遅刻に対する厳しい態度は、村上天皇や藤原道長のような指導力のある政治家において顕著であり、一方で下級官人のような、立場の弱い者に対して向けられやすいことも明らかとなった。

なお史料調査の過程で、当初計画では予想外の前提条件の部分に新しい発見があった。すなわち、

(1)貴族の時間意識、特に時間厳守に関わる報時用に導入された計時装置である漏刻は、日本においては単純に多段式のものが従来は想定されていた。しかし実際に存在が史料上確認できる漏刻は、平安時代末期に比叡山に存在した「十二時漏刻銘」で知られるもので、様態を検討すると水運蓋天儀仕様（蓋天説を模った宇宙構造モデルの水時計）である。これは中国南朝の梁武帝が作らせた水運蓋天儀との関係が想定できる。

（次は、一部想像を交えての「十二時漏刻」復原図である）



(2)起源が不明であった日本の時刻制度である一日四十八刻制も、梁武が一時採用した九十六刻制の変形である可能性を指摘できた。

(3)以上のこと等から、古代・中世の日本の宇宙構造論として、中国で主流だった渾天説だけではなく、仏教の須弥山説との類似性から、中国ではその有効性を否定されていた蓋天説が、一定の支持をえていたことも判明した。梁武は仏教篤信者であり仏教は儀式執行のため報時を重視する。また中国南朝は百済を介して日本（倭国）と密接な関係にあった。これより平安貴族の時間意識の起源も、中国南朝並びに仏教を考慮すべきことが明らかとなった。あわせて時間の目安となる天体の運行を、平安貴族がどのように理解していたのかも判明したことになる。

(4)北部九州などの海民による天体観測、また北斗七星による計時の様相も指摘した。

(5)中世においては、仏教が勢力を有した関係で、古代以上に蓋天説と須弥山説とが一体の形で社会に浸透していた様相も明らかにした。また、須弥山説を支持する僧侶と渾天説を支持する暦道（陰陽道）の対立の焦点が、月の運動（盈虚と月食）にあることも明らかにできた。

(6) 従来の通説的な見方では、ヨーロッパの自然学・技術が伝来する大航海時代以前の日本人は科学的関心が弱く、宇宙構造に興味がなかったとされる。しかし中世において渾天説・須弥山説という二種類の宇宙構造論が対立した結果、知識人の宇宙構造論への関心は極めて高かった。またキリスト教宣教師がもたらした地球説は、渾天説の改良版と見なされた。

この他、本事業研究を進める過程で、報告者は 2009 年 6 月の日本時間学会創設に設立準備委員として関わり、現在その運営に携わっている。時間学という新たな学問領域の確立を目的とする本学会の誕生は、人間と時間の関係を解明しようとする本事業研究の大目的にとってきわめて有益である。従って、このことも広い意味で、本事業研究の成果と言うことができるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①HOSOI Hiroshi、THEORIES ABOUT COSMIC STRUCTURE IN ANCIENT AND MEDIEVAL JAPAN、Proceedings of International Conference of Oriental Astronomy No 7 、（予定）、2011、査読有
②細井浩志、平安貴族の遅刻について－摂関期を中心に－、時間学研究 4（学会誌創刊号）、31-47 頁、2011、査読有
③細井浩志、平安時代儀式書における主要年中行事の時刻史料（抄）、活水論文集　人間関係学科編　54、47-80 頁、2011、査読無
④細井浩志、中国天文思想導入以前の倭国の天体観に関する覚書－天体信仰と暦
桃山学院大学総合研究所紀要 34-2、45-62 頁、2008、査読無
⑤細井浩志、日本古代の宇宙構造論と初期陰陽寮技術の起源―特に蓋天説と漏刻をめぐ

って、東アジア文化環流 1-2、65-86 頁、2008、査読有

〔学会発表〕（計３件）

①HOSOI Hiroshi、THEORIES ABOUT COSMIC STRUCTURE IN ANCIENT AND MEDIEVAL JAPAN、 International Conference of Oriental Astronomy No 7 、2010 年 9 月 6 日、国立天文台

②細井浩志、平安貴族の遅刻について－摂関期を中心に－、第 3 回天文学史研究会、2009 年 12 月 19 日、国立天文台

③細井浩志、近世以前の日本における宇宙論的関心―日本人は宇宙構造に無関心だったのか、中日若手研究者交流ワークショップ『伝来する<知>、変容する<知>―占い―願いと欲望―』、2007 年 12 月 8 日、浙江工商大学日本文化研究所（中国）

〔図書〕（計１件）

① 服部英雄・井上聡・細井浩志・橋本雄・楠瀬慶太、非文字知社会と中世の時間・暦・交通通信・流通に関する研究、九州大学、https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/17911、2010、1-11 頁（中世日本の宇宙構造論に関する覚書－日本人の宇宙観についての見通し）

〔その他〕

ホームページ等

① http://www.andrew.ac.jp/soken/sokenk178-2.pdf

② https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/17911

６．研究組織

(1)研究代表者

細井　浩志（HOSOI　HIROSHI）
活水女子大学・文学部・教授
研究者番号：30263990